

猫蓑通信



第 82号
平成 23年
(2011年)
1月15日発行
(年4回発行)

連句の笑い

青木秀樹

新年おめでとございます。
今年も研鑽に励み、東明雅先生に教えていただいた連句を楽しみたいと思います。連句は人と人との交流により、詩魂をぶつけ合ってひとつの作品をつくりあげる文芸です。また、様々な人と出会うことで自分を磨くことができます。

昨年十一月、私は大勢の方との出会いの場を経験しました。一日には岡山市での国民文化祭、十四日には萩市で、十六日には別府市でそれぞれ県民芸術文化祭、二十八日には京都市で国民文化祭プレ大会に参加しました。いずれも初心者を迎えた席でしたので、これから連句を楽しもうという方々が次々に現れることを頼もしく思いました。連句を楽しむためには、「素直に連想を働かせる」ことが重要だと言いつつ、自分も初心に帰ることを思いました。

連句の源流をたどると、その原点は俳言・俗語を用いる庶民性と滑稽性の文芸であることです。隠者めいた暮らしをし、わびとさびの美を志向した芭蕉にも、滑稽についての確かな意識があり、初心者にも笑いの大切さを教えたことは去来抄にも記されています。ただ、芭蕉が求めた笑いは宗鑑以来の詞に

発句なり芭蕉桃青宿の春

座頭か与人に見られて月見哉

いざさらば雪見にころぶ所迄

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也

猪もともに吹かるる野分かな

半日は神を友にや年忘れ

吞明て花生にせん二升樽

麦めしにやつるる恋か猫の妻

我宿は蚊のちひさきを馳走哉

煤はきは己が棚つる大工かな

いきながら一つに氷る海鼠哉

蕎麦はまだ花でもてなす山路かな

さらに私たちの師である東明雅先生の発句を『猫蓑庵発句集』から何句か拾ってみました。

風光る卵の黄味の濃くなりぬ

あたたかや皿にはみだす稲荷鮎

花踏んで年々歳々惚けにけり

三鬼忌や机上さまよふはぐれ蟻

庫裏の縁下は無間の蟻地獄

喋々の水菓喃々バナナパフェ



●目次●

第百十五回 猫蓑会例会 明雅忌二十韻十巻

平成二十二年〜二十三年度 猫蓑会正式俳諧配役

芭蕉忌正式俳諧 脇起二十韻「みな出て」

ウィーン連句会

口入でのハブニング

連詩と連句

ハイクと俳句

温故知新 4…受け渡し流浪つことの意味

国際連句体験記

A C C 連句入門教室のこと

猫蓑会入会を振り返って

事務局だより

2 2 3 6 7 8 11 12 14 15 16

靴下に蝶の刺繍(刺繍)巴里祭

割箸と語る楊枝の夜長かな

ちちろ啼く古稀で始めし厨事

反省の猿も高座に円朝忌

けちばかりつける女や藪虱

秋灯恋さまさまの七部集

煮凝のやさしく箸にさからひぬ

昼の酒連れいつよりか雪女

夢の世に住みて夫婦や煮大根

古曆写楽の鼻も見納めに

多分、明雅先生は「芭蕉さんと一緒にしてくれるなよ」とおっしゃると思います。笑い、ユーモアの感覚は人それぞれでしょう。猫蓑会の方の作品をみると、ところどころに上質のユーモアがちりばめられています。明雅流の連句はこれだなければと思います。今年も楽しく連句を巻きましょう。



1・花野の座

脇起二十韻「秋燕」

原田千町 捌

秋燕翁の跡を辿るなり

明雅仏

桜紅葉に染まる山里

千町

ひんがしの空に夕月現れて

郁子

パソコンでする写真編集

明子

ウ 愛猫の威張つて帰りねたる餌

節子

すぐと言はれて三日待たされ

了斎

恋の歌喇叭で吹いて法螺も吹き

斎

遠くに響く教会の鐘

郁

スキー板ワックス厚く塗り重ね

明

露天風呂から望む雪嶺

斎

ナオ 総理より官房長官えらさうで

節

昔は左翼いまは強欲

斎

幸福も不幸も運ぶ引越便

節

二人を結ぶ焼酎の味

郁

月も汗惚気微に入り細に入り

斎

色即是空にはか雲水

節

ナウ 父祖の地に新しき夢芽生えぬて

明

裏の小川に田螺取る子ら

郁

爛漫の花に乞はれて青海波

町

笑顔を交す暖かな席

明

連衆 東 郁子 野口明子 長坂節子

鈴木了斎

2・翁草の座

脇起二十韻「恋とまごまご」

高橋豊美 捌

秋灯恋さまさまの七部集

明雅仏

後の月見に妻のうたた寝

豊美

木の実降る音途絶えたる窓際に

恭子

下駄を残して駆ける子を追ふ

曜子

ウ 仁王様に睨まれてゐる吾がハート

良子

OB杭をちよつと動かす

鐵男

日帰りの温泉旅行会津富士

豊

香りで分かる梅雨の前触れ

恭

お気に入り縮着こなしそそくさと

曜

丁か半かと賭場のにぎはひ

良

ナオ スポットを当てれば木偶も踊り出し

男

鉛の兵隊溶かす愛情

豊

黒髪を売つてあなたの酒に代へ

恭

もつれて歩む凍晴の道

曜

寒灸あちちあちちと月の宵

良

潜望鏡を回す艦長

男

ナウ イグアナの陸から海に棲み替へて

豊

卒業式に族会する

恭

祖父様の植系し大樹の花吹雪

曜

忘れ角あり草原の果

良

連衆 式田恭子 前田曜子 本屋良子

林 鐵男

平成二十二〜二十三年度
猫蓑会正式俳諧配役

宗匠	橋	文子
脇宗匠	上月	淳子
執筆	林	鐵男
知司	根津	忠史
副知司	内田	遊民
座配	内田	遊民
座見	永田	吉文
花司	西田	一枝
香元	横山	わか
配硯	佐々木	有子
同	野口	明子
老長	青木	秀樹



3・野菊の座

脇起二十韻「恋さまさま」 染谷佳之子 捌

秋灯恋さまさまの七部集

明雅仏

君待つ庭に昇る明月

佳之子

新走さしつさされつきりもなし

美奈子

からくり時計不意に鳴り出す

誠二

ウ 母子像のステンドグラス鎮もりて

秀樹

丘に登れば真つ青な海

有子

ちよつと寄るつもりがいつか長居せる

誠

円高続きひまな職人

樹

救出のトリをつとめた老リーダー

奈

何メートルも跳べる飛魚

有

ナオ 尖閣はおらが領土とはたした神

奈

信長公の癩癩の筋

誠

熱しやすくまた冷めやすい美女のみて

樹

氷の笑みがたまらなくいい

奈

月冴えて大枚はたくラスベガス

有

自慢話は二倍三倍

誠

ナウ 敗戦の子等のおやつはかるめやき

樹

弥勒菩薩の頬撫つる東風

之

ぬくもりの御掌に降りし花の片

奈

旅の座興に聞きし雉笛

有

連衆 鈴木美奈子 長沼誠二 青木秀樹

佐々木有子



4・牛膝の座

脇起二十韻「小式部」 小池啓子 捌

色も香も紫式部か小式部か

明雅仏

空の袂に十三夜月

啓子

魚拓とる釣果の鱸揚げぬて

雅子

座敷の畳念入りに拭く

わこ

ウ たたずみて息で間をとる立稽古

孝子

逢へば聞き役またしてもまた

政治

恋を載せカッパドキアの熱気球

恭子

アッラーの神にお許しを乞ふ

雅

円高で得する奴もあるらしく

孝

猛暑日記録けふも更新

わ

ナオ 岩登り利那の声に綱切れて

恭

分校の子は村に三人

雅

じゃんけんぼんデイサービスのプチプリン

志

君の世話やく僕の生き甲斐

孝

月冴えて猫と私の喃々語

わ

スカイツリーと熱爛を酌み

雅

ナウチエロケース抱いて長距離バスの客

啓

蟻も地虫も穴を出る頃

恭

この年の花はどうかと笑む写真

孝

同じ夢見る昼ののどけさ

志

連衆 武井雅子 横山わこ 坂本孝子

峯田政志 高田恭子

第三十回俳諧芭蕉忌 正式俳諧

俳諧連歌

脇起二十韻「みな出て」

新両国の橋かかりければ

翁

みな出て橋をいたたく霜路哉

秀樹

風除をする見世物の小屋

守男

気合よし名人りの樽を積み上げて

わこ

残る暑さの時を哲学

ゆみ

猫の尾のぴーんと立って三日ノ月

淳子

秋祭には帰れてふ文

あや

フィアンセはミスワールドのそっくりさん

遊民

美乳美脚を研くアロマ油

孝子

政界の風刺漫画に胸がすき

忠史

天安門が空にくつきり

達子

男の子に生まれ外寝楽しき

一枝

肝試し遊んだ頃の月の夜

有子

后となれる人を奪ひに

明子

水茎の跡うるはしき相聞歌

雅子

蔵書の印がどうも傾く

央子

ナウ 十姉妹ヘルパーの手に戯れる

吉文

句の蛭を腕に調べ

敦子

花の奥自然法爾の境地にて

文子

点景はるか畦を塗る人

執筆

平成二十二年十月二十日 首尾

於 江東区芭蕉記念館

5・龍膽の座

脇起二十韻「虚実皮膜」

由井健 捌

味はひは虚実皮膜の新酒かな 明雅仏

走り蕎麦打つ達人の芸 健

蒼き月広き湖面を渡るらん 文子

いまめづらしいポストまん丸 碧

ウ 従兄弟会全員集合二十名 忠史

寅さんに似た一途なる奴 一枝

逢ひたくて北の涯まで追ひかける 健

そつとすくひし君の黒髪 子

数千の蟬の抜け殻もなく 碧

富士山詣先達は御師 史

ナオ 見直したそんなに孝心篤いとは 枝

なくした財布すぐに戻つて 健

お隣の超大国に悩まされ 子

着膨れデート中華街へと 碧

プロポーズ降誕祭の月の塔 枝

沙翁劇には悲喜も交々 子

ナウ すぎにには箆筒文箱にひそみぬて 碧

淡雪溶けて肩のほどける 枝

花心今日は何処に遊ぶやら 健

子猫と子供戯るる縁 子

連衆 橘 文子 松本 碧 根津忠史

西田 一枝

6・千草の座

脇起二十韻「紙剪れば」

市野沢弘子 捌

紙剪れば紙にも秋の声生まる 明雅仏

栗名月の昇り来る窓 弘子

雁の分水嶺を越えゆきて 常義

ハンチング帽とばす自転車 未悠

ウ あの彼女何も告げずにどこへやら 達子

そつと腕組み消えた裏口 敦子

板扉に相合傘のマークあり 義

三十三人無事に救出 敦

糠漬けの胡瓜まっことうまいこと 達

麻ののれんを揺らすそよ風 義

ナオ バーチャルの商店街で御買物 悠

まさかと言ふ坂あるも人の世 達

神仏のおかげか見合うまくゆき 敦

隙間風には愛の搔卷 義

なまはげが出を待つてゐる月の宴 達

すぐずりさがるめがねおさへつ 悠

ナウ 外国へ老のかばんを小さめに 弘

城下町ではすすむ雪解け 義

ドレミファソ蝌蚪の連なる花筏 敦

しゃぼん玉吹く園児らの列 悠

連衆 生田日常義 棚町未悠 篠原達子

武井敦子

7・刈萱の座

脇起二十韻「ちちろ啼く」

長崎和代 捌

喉走る酒が命やちちろ啼く 明雅仏

名残の月の覗く天窓 和代

里山の桑括る人遠近に 暁巳

マナーモードに換へるケータイ 三実

ウ 抱へたるけふ搬入の自信作 央子

きはどいとこ襟ぐりの線 昭

ココ・シヤネルアミ次々と餌食にし 巳

ワンマン社長と策す合併 昭

訪中団待機してゐる雪解富士 央

手入れもせずに金魚草咲く 三

ナオ 分教場白き歯並に癒されて 巳

大繁昌の整形の医師 央

電線にふくら雀のびつしりと 巳

警策の音響く寒月 昭

祈りても酔ひても消せぬ君の顔 央

王のお伽は千人の美姫 代

ナウ キックオフ大西洋をひとまたぎ 三

ドリトル先生開くのどけさ 巳

ひとりゐて天上天下花のとき 央

古城遙かにかぎろひの中 昭

連衆 島村暁巳 滝沢三実 遠藤央子

松原 昭



8・真葛の座

脇起二十韻「円朝忌」 佐古英子 捌

反省の猿も高座に円朝忌

明雅仏

扇を置きて舌耕の芸※

英子

月を浴び連絡船を待つならん

あや

残る煙草を探るボケツト

路子

ウ 予定表消して加へてまた消して

泉子

堅い君にもはあとあるはず

鄭和

カップリング触媒体は強力で

路

急いで洗ふべたべたの指

や

すつ裸子等の飛び込む青き淵

和

ギヤマン越しに揺れてゐる母

泉

ナオ 牧師館日本庭園自慢して

や

甘い勧めにつひつまむチョコ

和

褐色の肌をシーツに押へつけ

同

噫連発野暮なのぞき見

や

凍月に有髪くさめの尼の歎くらむ

路

源氏絵巻を酒の肴に

和

ナウ 現世へ七百米カプセルで

路

北窓開く頃となりたり

泉

薄紅の長く裾ひく花の里

英

体育クラブ春の遠征

や

連衆 中林あや 倉本路子 青木泉水

高山鄭和

註・舌耕の芸は講義、講演、演説など弁舌によつて生業を営むこと

9・忍草の座

脇起二十韻「水の秋」 梅田實 捌

水の秋昔深川橋幾つ

明雅仏

著くこぼるる雁金の声

實

後の月書庫より蔵書選びゐて

遊民

クレヨンで描く大陸の地図

吉文

ウ 乳を欲りて幼おななは母の胸探り

美恵

やり場に困る眼泳がせ

民

言ひ寄られふらつく心きめかねる

實

タロットカード運ぶ幌馬車

恵

円高に熱爛呷る町工場

文

枯葉朽葉がかさこそと鳴り

實

ナオ マチュピチュに遺構のトイレぼっかりと

民

役者きどりでポーズいろいろ

文

大聖堂献金いつも懐に

恵

手に手を重ね包む蚩

民

羅に昂る想ひ月の影

實

松園の美女凜として舞ふ

恵

ナウ パソコンに負けた将棋の有段者

文

ふらここ漕いで飛ばす青春

民

花の宴吹奏楽に聞き惚れて

文

猫の尻尾に遊ぶ蝶々

恵

連衆 内田遊民 永田吉文 山口美恵

10・浅茅の座

脇起二十韻「水の秋」 高塚霞 捌

水の秋昔深川橋いくつ

明雅仏

舟端たたく月光の波

霞

早生蜜柑子等賑やかに剥くならん

淳子

音楽室でピアノ弾きぬる

士郎

ウ 骨格の基本は足の裏にあり

アンズ

二人で走る氏神の坂

志世子

シヨットバー女ながらの飲みっぷり

ア

猫がのっそり過ぎる窓際

世

草蓐籠いっぱいに摘みためて

淳

久方ぶりにつけるパルファミ

士

ナオ 贅沢な風呂の遺跡がポンペイに

ア

病よき日は夢語る母

世

少年の月へ行くぞと声冴ゆる

淳

木枯のなか想ひたぎらせ

士

十六で恋の表裏を知りつくし

淳

楽書だらけ歴史教本

ア

ナウ リュック撫で地図の上なる旅をして

淳

札所の寺に春時雨来る

ア

根尾村の淡墨匂ふ花ふぶき

世

詩を書き留むる囀の中

士

連衆 上月淳子 横井士郎 松島アンズ

秋山志世子



平成二十二年十月二十日
於 江東区芭蕉記念館

ウィーンへの連句会 〈南柏雑記 2〉

東明雅

昭和五十九（一九八四）年三月一日発行

『季刊連句』第四号より転載

ウィーン大学に留学している小沢幸夫君からクリスマスカードが届いた。

お元気でいらつしやいますでしょうか。先日こちらでグリンバルツァー賞という一種の文化勲章を受けられた日本人の方がいらつしや、それを記念して演劇学教授のディートリヒ先生が祝賀会を催されました。その際、日本の口承

ロスでのハプニング 〈南柏雑記 13〉

東明雅

昭和六十一（一九八六）年十二月一日発行

『季刊連句』第十五号より転載

去年二月、ロス郊外バロス・ベルデスに住む娘の家で、子守りと芝刈りを二週間やり、それがとても楽しかったので、今度もそのつもりで、しかも二月行つた時暖かだったので、今度は八月、さぞかし暑いことだろうと、半袖のシャツとズボン、それも普段着のごくラフなスタイルで行つたのが失敗だった。第一、八月と言つて

文学の話から座の文学の話となり、それでは連句などやってみようということになりました。何分皆門外漢なので出来はめちやくちやでした。が楽しい一時を過ごしました。

ウィーンは今クリスマスの準備に忙しい毎日です。市庁舎前の広場には連日市が立ちチョコレートなどを売っています。街角には至る所モミの木が立てられ、夜ともなればイルミネーションがとてもきれいです。

こちらは毎日零下という寒い日が続きますが、柏の方は如何でしょうか。風邪など引きませぬよう、よい年をお迎え下さい。

小沢君は信州大学で私が教えた学生である。

もそんなに暑くない。気温は相当高いのだが、湿気がなくてさらりとしている。バロス・ベルデスは海につき出た半島だから、海風が強く、夕方など半袖では冷え冷えた。それから、日本を発つ時、俳人協会理事長の草間時彦さんちよつとそのことをお話ししたら、向うの俳人を紹介して下さるとのこと、これもお茶を飲む位のことかと、気軽に御厚意を受けた。

ところが、その紹介された竹本義人博士にお逢いしたらロスとサンディエゴで講演をしてくれとのこと慌てた。

まさか、よれよれの半袖、汚れたズボン、ぼろぼろの靴では、いくら心臓の私でも外国の紳

北海道大学の大学院から、一昨年ウィーンに留学したのだが、ウィーンと言えば私の憧れの都、そこで彼はどんな生活を送っていることだろう。それにしても、日本人が異郷の地で集まつて連句を巻いたとはおもしろい。そう言えば、いつか三橋敏雄さんにお逢いた時、終戦直後、三橋さんの俳句仲間が初めて再会して、すぐに始まったのが連句だったというお話を聞いた。異郷の地といい、戦争直後といい、日本人は何か非常の時は、お互の気持を通わせ確か合う唯一の手段として、連句を取り上げるのではあるまいか。ウィーンでの作品がどんなものか知りたいものである。

土・淑女の前に立つわけにはいかないではないか。そこですぐ近くのシアーズというデパートに行き、早速、一応の身のまわりを整えた。参考までにお値段は、上着一七〇弗、ズボン五八弗、靴六四弗。感心したのは上着もズボンもちつとも直さずにびたりとそのまま着れたことだ。日本のデパートでは、A6で間にあう私だが、ズボンは裾がまつてないので、それを合わせなければならぬ。だが、アメリカのはその苦勞もなくびたりだった。広いアメリカだが、私と全く同型の人間が居るといふことは嬉しかった。

ところで、肝腎の講演は八月十六日と十七日、

サンディエゴの菊ガーデンとロスアンゼルスの日米文化会館で行なわれた。ロスアンゼルスには十万の日系市民が住み、サンディエゴとともに俳句の結社が幾つもあつて、なかなか盛んである。竹本博士も「鷹」（藤田湘子主宰）のメンバーの一人で、「病葉」（竹本義人全集第一巻）

連詩と連句

〈南柏雑記 40〉

東明雅

平成五（一九九三）年九月一日発行

『季刊連句』第四十二号より転載

一九六九年（昭和四十四年）四月、ヨーロッパで有名な四人の詩人がパリに集まつて、Rengaを作った。この四人の連衆の一人だったメキシコの詩人オクタビオ・パスは、Rengaの魅力について、その論理的・構成的なものと、また、集団詩としての要素をあげているが、このRengaに対して、大岡信氏が連詩という訳語を付けられたのは、まことに適切であった。Rengaはもちろん連歌であり、彼らが元来、意図したのは異国版の連句・俳諧だったであろうが、それを連詩としないで、連歌・連句と訳すると大きな誤解を生むものになる。

連詩はもちろん、五・七・五、七・七のリズムはないし、二花三月どころか、季語の意識もない。発句・脇・第三・挙句、あるいは折・面、さらに序、破、急と言った一巻の構成についても、

の著を頂戴したが、評論あり、詩学・俳学・歌学・随筆とより沢山の大変おもしろい本であった。しかも専門はミサイルの工学博士で、人柄のよい親切な方であった。聴衆は両方とも三十人程度、二世・三世の方が多かったが、四世ともおぼしき人も交じつて、熱心に聴いて下さった。

何の規定もない。大体、一巻を何句で纏めるかという規定もないのだから、それはむしろ当然であろう。しかし、そんなものは約束事であるから、どうにでもなる、どうだつてかまわないことである。

連詩は言つて見れば、親しい詩人が何人か、一台の丸テーブルを囲んで、次々に詩句をつないで行くものである。

1 ぼくはまた帰つて来た／この夏の港灣都市に／貿易のためではなく／世の中でまだ最も汚染されていない領域で／声を交換するために

信

2 この不意打ちの炎暑の地に／子供にかえつたバベルの塔／数十の言語がひびく

ウイレム

3 文法をびよんびよんスキップしたり／独楽のようにくるくる回りながら／敷石の数をかぞえかぞえ／ぼくはやつとホテルのバーにたどりつく

ヘンク（ベルンレフ）

連句（連歌）に存在して、この連詩にないも

私は芭蕉の話から連句、歌仙から二十韻の新しい形について大いに宣伝した。八月二十二日、竹本御夫妻を迎え、家内を交えて四吟の二十韻を作ったが、これがアメリカで初めての二十韻であることだけは確かである。

のは何だろう。それは誰でもすぐ気づかれるように「転じ」という意識、あるいはメカニズムが全く存在しないのである。1・2・3は全く一続きの風景・動作・感情で貫かれている。これは明らかに我々の先祖が作り出した連句（連歌）とは決定的に異なる別物である。

「付句は前句にのみついて、打越の句とは全く縁がない。このような関係を何回も何十回も繰り返して一巻の作品が削り出される。……この独特の運動、メカニズムさえ失わなければ、その一巻がどのような形式をとろうとも、どのような式目を採用しようとも、私はそれを連句と認めようと思う」（昭和五十八年「季刊連句」創刊号）

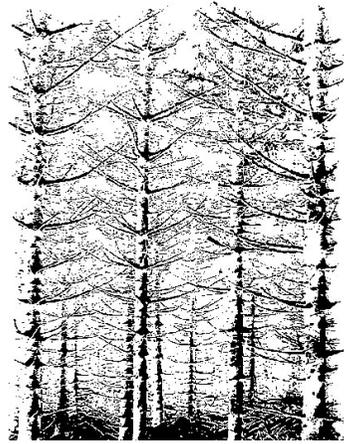
連詩と連句とは全く別の文芸である。しかし、外人と交歓して行くには、連詩の方が分かりやすく、手軽であるかも知れない。

連詩は連詩として今後の隆盛を期待する。



ハイクと俳句

加藤 K



フランクフルト・アム・マインはほぼ北緯五〇度、サハリンの中央と同位置であり高緯度です。ドイツは自然・言語・文化も異なり、美的感覚も、例えばシンメトリーを第一とし、飛び石の感覚がありません。グリムの研究によれば、「秋」という言葉のなかった北の異土へ、季題詩が受容されるでしょうか。

俳句がドイツ語圏へ伝えられてから百年有余になります。有名な俳人の優れた句の注釈はいくつかありますが、季題詩としては未だに伝わっていません。むしろ三行詩としてでしょうか。なぜなら日本の詩歌がもつ象徴表現の核となる季題がきちんと紹介されていないからです（英・仏語圏にも言えましょう）。W・グンデルト（ハンブルク大学学長）とH・ツァッハルト（ボン大学日本学教授）が指摘するには、ドイツで季題に対応する詩的言語は「クリスマス」と「聖

誕樹」だけだそうです（この二語からは様々な情景が胸に浮かぶ由）。ドイツ語圏へ俳句を説明するとき、この点は留意しなければなりませんでしょう。

俳句が、K・フロレンツ（O・A・G所長）からグンデルトを通してH・ヘッセに伝わったとき、

「私の心は「……」この日本の叙情詩にまったく魅了されました。とりわけこの詩のめざす極度の単純と簡潔への努力にひかれました。「……」日本人は一七音節詩（das SiebzehnSilbengeicht）とこう素晴らしい発明をなしたのです」

『愛読書』（二九四五）と題する随想で述べています。しかし、ヘッセの理解は正しくない。日文学研究者（Japanologe）たちも間違っていて伝えています。俳句は十七拍（音節単位）であり、十七音節（Silben）ではありません。音節にはそれぞれ意味があり、十七音節の情報量は一般的に言って俳句より格段に多いのです。

次に、「詩＝Gedicht」ですが、刈り込んだ省略の表現はドイツ語では「詩」と言わない。「詩を書く＝dichten」のdichtの意は①密な②濃い（霧・煙）③水（光・空気）を通さない、ことであり、本意は対象を「濃密に」寸分の隙なく（言葉で）描出することです。ドイツの詩は伝統的に長詩です。俳句を「十七音節詩」または「ハイク＝詩（Gedicht）」と呼称すれば、「刈り込んだ」「省略」の属性はその背後で消失します（本文中「ハイク」とはドイツ語の Haiku

を示す）。

俳句はドイツ語圏に第二次大戦以降（ヘッセ以降）どのように伝えられたでしょうか。

六〇年代後半旧西ドイツの高等学校国語教科書『レーゼブーフA8』（中学二年相当）に芭蕉、去来らの七句の独訳俳句が初めて掲載されました。教師用指導冊子には次のように説明されています。

俳句は短詩（Kurzgedicht）で日本で数世紀にわたって愛好されている。形式は三行十七音節で、五・七・五の順序で配列されている。韻や脚韻はないが、音節は重視されている。「……」ドイツ語に訳した場合、このことは必ずしも可能とは限らない。

石島雉子郎（埼玉・ホトトギス）の

Ein Karpfen treibt:

eine Kastanie fällt:

die Wasserringe schlagen zusammen.

（原句 鯉浮いて栗落ちて水輪相うつり）

独訳句は原句の表現と対応しています。指導冊子では次のように解説して、掲句を解釈させます。

三行で三光景の組み合わせ。最初に二行は互いに関係のない偶然の出来事。その後の沈黙と期待（一、二行目の末尾のセミコロオンが示す）。三行目、謎めいた法則性をもつ魅力的な出来事。最後の行はこの事象にふさわしく、低く響くような語調で読む。言葉は（濁音と共に）沈黙の中へ沈んでい

く。(筆者注・濁音の箇所が三行目に五つ
でてくる)——単なる模倣を超え、これを
凌駕する多くのことが示されるであろう。

沈黙をとおして多くを語る。この指摘は注目
すべき解説でしょう。しかし本書でも「十七音
節の短詩」として紹介されています。ドイツ語
圏では今日ハイクと言えはこの形式です。(ハ
イク詩・ハイク文学は一般にハイクと呼ば
れている)

千名近くいるハイク実作者の中で、虚子を
誰よりも尊敬したミュンヒェンのG・クリンゲ
(二九一〇～二〇〇九)の作品を紹介します。実相
観入に基づいたものでドイツ人にありがちな観
念的な傾向ではありません。ハイク詩として
は極めて優れていますが、俳句ではありません。

Schneeflocken fallen —— 五音節

und sie berühren sich nicht. 七音節

Nur daraus lernen. 五音節

(大意) 雪片が降ってくる／そしてそれ
らは互いに触れ合わない／ひたすらそこ
から学ぶ)

この三行をもし俳句としてみるなら、最終の
三行目は削除します。そうなるとハイク詩と
して最も肝要な表現が欠落し、「詩=Gedicht」
ではなくなります。

私は俳句として訳したとき、

雪片の触れ合ふこともなく舞へり

としました。これは俳句の観点とハイクの観
点が同一の視座であり、「雪片」の本意が日本
とドイツの双方で一致した希有な例であるので

訳せました。また作者が優れたハイク理解者だ
からです。

日本の詩歌について深い学識をもち、国語教
科書にも千代尼の句を独訳したドイツの詩人
M・ハオスマンは高安国世(京大名誉教授・独文
学)と共同作業で高安の歌集『千鳥の呼び声』
(一九六二)をドイツで刊行しました。ハオスマ
ンはドイツ詩と俳句・叙情詩のリズムは本質的
に異なるといふ見解から古典的(ギリシア・ロー
マ)の詩形式を用いず、自由な翻訳を試みます。

彼は『愛、死、そして満月の夜』(一九五二)で
日本の凝縮された詩(俳句)がドイツ人の琴線
に触れるには、「理解を得るためにいくつかの
本質的な前提条件が欠けている」ので、俳句を
「慎重に畏敬の念を払いながら自由に、かつ大
胆に」翻訳する必要がある。すなわち、

「日本に咲いているこの詩の花を、いわば
種子にひとたび戻し、そして種子にして、
この花をドイツ人の心のなかに詩かなけれ
ばならない。」

と述べています。

夏草や兵どもが夢の跡

を次のように表現していますが、季題「夏草」
については触れておりません。あえて避けたの
でしょうか。

Bühendes Gras auf dem alten Schlachtfeld

十音節

den Träumen entsprossen

六音節

der toten Krieger.

五音節

(大意) 花咲ける古戦場の草は／数々の
夢から生まれた／死せる戦士たちの)

しかしこれは三行詩であって、掲句の翻訳で
はない。芭蕉の詠む、生命感に溢れる夏の草と
散華して土に還った戦士の夢との乖離が伝わっ
てきません。「不易流行」の思想の句とは程遠い、
と言わざるを得ません。

俳句を稲畑汀子から学び、影響を受けていた
クリンゲは講演のたびごとに、ドイツの詩人た
ちの作品を集めて「歳時記」の必要性を説く。
そして私には二十有余年ほど前に日本側からの
歳時記の独訳を依頼してきました。俳人でもな
い独文学の学徒に、まさにサハラ砂漠に水を求
めるよりも困難な仕事でした。それでも数年か
けて或る歳時記の「春」の部と、季語の歴史の
訳出をしました。が惨憺たる失敗で、クリンゲも
匙を投げ出しました。私はこの仕事には、俳人
に比肩する優れた感性をもつドイツ人の協力が
なければ不可能と思ひ、W・シャウマン(大正
大学比較文化学教授 Dr. phil.)に協力を仰ぎ、試
行錯誤の十年有余、六年前の十一月に永田龍
太郎の好意および虚子記念館、ドイツ語学文学
振興会他の刊行助成で『Singen von Blüte und
Vogel』を永田書房から刊行、子規から花鳥諷
詠に至る経緯を概略し『虚子編・新歳時記』か
ら主要な季題三五〇項目ほどを選び、例句も本歳
時記を中心にドイツ人にも分かりやすいものを
抜き出し説明を加えました。わけても腐心した
のは、この一冊で、日本の生活と風習・文化、

ドイツの至る処に自生する或る種の山毛櫨の葉は枯れても冬中なお枝に付いている。

春になり枯葉が「芽」の発育を妨げるときは「芽」はこのように尖端で枯葉を突き刺し枝から持ち上げるようにして落とすのである（三月ボン郊外で）。

H・シュティレットは、形式ならびに内容に至るまでハイクを俳句に適應させることを主張し、社会批判の発言をハイクで再現しようと試みている。

Die prächtig flatternden Blätter werdem
an den noch verborgenen aber schon
leise knisternden Knospen verenden.

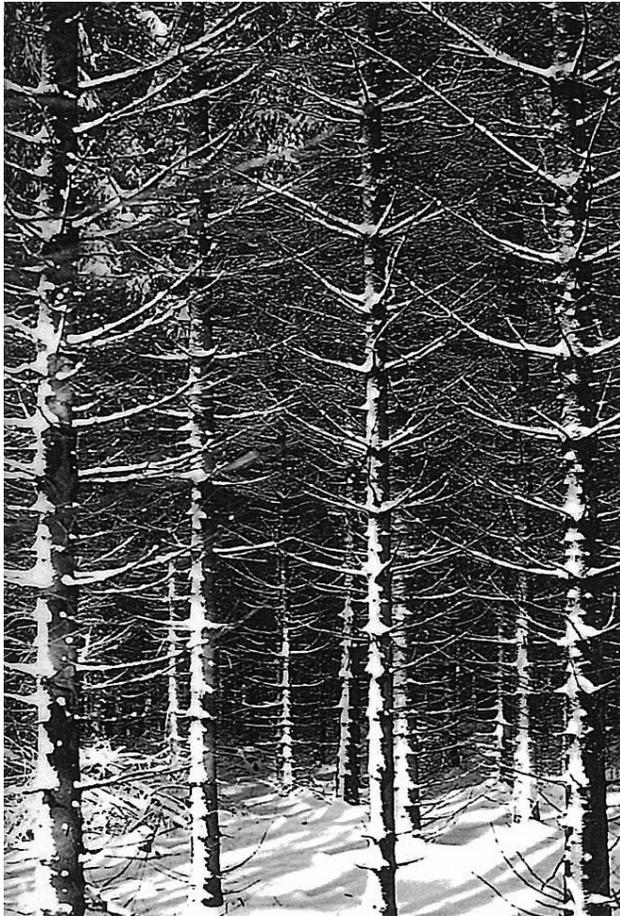
（大意 華麗に翻っている木々の葉は／今はまだ隠れているが、しかしすでに／ぎしぎし音をたてている幼芽によって倒れてゆくであろう）

私達日本の俳人は、同じ「木の芽」でも「みどり子のまばたくたびに木の芽増え 龍太」や「美しく木の芽の如くつつましく 紀陽」



ドイツ人の美意識には日本庭園で見られるような「飛び石」の感覚がない。左右対称の美しさである。

ドイツには日本のような強風があまり吹かないそのためであろうか、木の枝でも左右対称の美しさをもつ。アーレンスブルクの庭園は並木の幹がY字型になるよう剪定されている。（三月ザウアーラントで）



時候、動植物など、理解できるようにしたこと
です。

芭蕉の「夏草や」の句は季題の象徴的解説と、
流転と永遠を観ずる芭蕉の説明を加えて、ドイ
ツ語を原句の表現に（成否はともかく）対応さ
せながら、次のように独訳しました。

Sommergras — 三音節

der Krieger Träume 五音節

leize Spur: 三音節

（大意 夏草や／兵どもの夢の／最期の
跡）

シャウマンと私が議論しながら決めた俳句の
紹介の方針はごく常識的で迂遠のようですが、

(1)歳時記の季題（季語）とその説明を正確に訳し、(2)他の例句の注釈もできるだけ関連させながら背景とし、(3)掲句をそのまま簡潔に独訳し、(4)ドイツ人に理解され得る注釈をつける。この方法で俳句はその句心をとおして伝わるでしょう。私はハイクを否定するつもりはありません。ドイツにおける最短短詩形は四行です。にも拘らず三行（Dreizeiler）でクリンゲのようにハイクを見做いながら、ハイクを作って欲しいと願います。俳句とハイク交流に日本側からできることは、わが国のすぐれた季題詩を伝達することで、ハイクを我々の視点から「俳句」に添削することではありません。（文中敬称略）

温故知新

4…受け渡しし流浪うことの意味

●かく流浪ひ失ひてば

『中臣大祓詞』より 七世紀後半頃成立

(前略) 国内に成り出でむ天の益人らが過ち犯しけむ種種の罪事は、天津罪、国津罪、ここだくの罪出む。かく出でば天津宮事もちて、天津金木を本打ち切り末打ち断ちて、千座の置座に置き足らはして、天津菅麻を本刈り断ち末刈り切りて、八針に取裂きて、天津祝詞の太祝詞事を宣れ。

(中略) 高山の末、短山の末よりさくなだりに落ち滾つ速川の瀬に坐す瀬織津比売といふ神、大海原に持ち出でなむ。

かく持ち出でいなば、荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百会に坐す速開都比売といふ神、持ちかか呑みてむ。

かくかか呑みてば、気吹戸に坐す気吹戸主といふ神、根の国底の国に気吹放ちてむ。

かく気吹放ちてば、根の国底の国に坐す速佐須良比売といふ神、持ち流浪ひ失ひてむ。かく流浪ひ失ひてば、罪と云ふ罪はあらじと。

祓へ給ひ清め給ふ事を、天津神国津神八百万の神たちともに聞こしめせと白す。

《現代語訳》

(前略) 国内に自然に殖えていく民衆は、過つ

て様々な種類の罪を犯すことでしょう。天の罪地の罪(古代の罪はこの二つに大別された)など、そうした罪科が沢山にあらわれてきます。そうしたならば、天の宮殿で行われてきた神聖な方式に従って、木の枝の元と末を両方切り捨てた残りを蔓で結束した置台の上に、多くの祓えものを置き、清浄な菅麻を木の枝と同じように元と末を切り捨て、中程を取り、針で八つ裂きにして祓い串のようにして祓いの神事をとり行い、天の神のお授けくださった強い霊力を持つ祓いの祝詞を申し唱えなさい。

(中略) このように祝詞で祓い浄められた全ての罪を、さらに) 高い山低い山の頂からザバザバと谷間を下って落ちてくる急流の瀬におられます「早瀬を織りなす女神」というお名前前の神様が大海原に持って行かれるでしょう。

このように罪を海へ持ち出して行ってくださいると、大海の遠い沖合で、あちこちから行き交う潮流が八重にも八百重にも渦巻くなかにおられます「素速く開き飲み込む女神」というお名前前の神様が、その罪を受け取って大きな口をあけて全部ガバガバと海のお腹に呑み込んでくださるでしょう。

このように罪をガバガバと呑み込んでくださいますと、海のお腹から地下の根の国底の国へガスを吹き出す出口のところにおられます「ガスの吹き出し口の主」というお名前前の神様が、それを根の国底の国に向かってプワツと吹き出してくださるでしょう。

このように罪をプワツと吹きだして下さいま

すと、根の国底の国におられます「さつさと流浪の旅に出る女神」というお名前前の神様がそれを受け取って流浪いの旅にお出になって、いつのまにかどこかへ失くしてしまわれるでしょう。このように流浪いのなかで罪を失くしてしまえば、もう罪という罪はどこにもありません。このように一切の罪をお祓い下さり、お浄め下さることを、天の神様、地の神様、八百万の神様、どうかお聞きとどけ下さるように、つつしんでお願い申し上げます。

解題●大祓詞は現在もしばしば唱えられる代表的な祝詞の一つ。前半は、多くを略したが罪を祓い浄めするためのさまざまな儀式の作法が述べられる。

ユニークなのは後半、罪祓いの締めくくり方。いろいろな神様が次々に舞台を変え、罪を受け渡していくうちに、次第に罪がうやむやになる。最後は流浪いを専門にする神様がその罪を持って流浪っているうちに、どこかへ失くしてしまふ。人間の罪はこうして最終的に消滅する。神事の締めくくりの言葉にしては、妙にユーモラスでいかげんな気もするが、とても救いがあるようにも思える。罪と罰をきっちりカウントして対応させるような世界より、こういういかげんな世界の方が暮らしやすそうだ。

牽強付会かもしれないが、後半部分は、イメージを次々に受け渡す連歌、連句を彷彿とさせる。もともと連歌には神に奉納されたものが多い。付け合いととはこういう浄め、癒しの行為でもあるかもしれない。西行、宗祇、芭蕉などの流浪の旅も思い出す。「東海道の一筋も知らぬ人、風雅におぼつかなし」(芭蕉の言葉・許六「韻塞」より)。

(齋)

国際連句体験記

鈴木了斎

二十二年十一月二十八日、京都の百万遍知恩寺で、二十三年京都府国民文化祭連句大会をめざしてのプレ大会が開催された。

この大会では（二十三年の本番でも）外国のゲストを迎えた国際連句の座が設けられ、近藤蕉肝さんのお誘いで筆者もその座に加えていただいた。

一座の捌きは蕉肝さん。連衆はアメリカのラファエル・デグルトラ (Rafael de Grutola) さん、中国のチェン・ミンキン (鄭民欽) さん、それに、国際連句をはじめの筆者。

国際連句というのは、座にたとえば日本語で作句する人と英語で作句する人がいれば、英語で句が提出されたとき、すぐにそれを日本語に訳さないと、日本語で作句する人がその次を付けることができない。逆の場合も同じだ。だから英語版と日本語版の作品が同時並行で出来上がって行くことになる。

今回はそれぞれ英語、中国語、日本語によって作句する連衆の座なので、英語版、中国語版、日本語版の三つのバージョンを同時並行で作りながら進めるという、一見したところかなり複雑なことになる。

京都大会準備全般にわたって大きな役割を果たしておられる蕉肝さんは、一九七〇年代からアメリカ合衆国での英語連句・俳句の振興に中心的存在の一人としてかかわってこられた方だ。連句国連（国際連句ネットワークの国連）設立を目指して、アメリカだけでなく広く国際的な連句人脈を築いておられる。日本語はもちろん、英語でも自在に作句される。ラファエルさんは、そうした蕉肝さんのアメリカ

での活動に古くからかかわっておられた、英語連句・俳句のベテランだ。ただし日本語や中国語はおできにならないらしい。

私達が「鄭先生」とお呼びする民欽さんは、万葉集や源氏物語から現代文学まで、そして芭蕉についても「奥のほそ道」その他、多くの日本文学の中国語訳書を出しておられる日本文学者。日本語の句をただちに中国語に訳してくださるが、英語はさほどお得意ではないようだ。

筆者について言えば、英語体験は多少あるものの、三十年以上使わなかったもので、すでにすっかり錆びついている。英語で句を発想したりすることもまずむずかしい。しかし読めばなんとか理解はできる。中国語の句については、漢字文化圏に属して漢詩なども教わっているおかげで、読めば英語の句と同程度には理解することができる。しかし自分で中国語の句を作ることはできない。中国語については、おそらく蕉肝さんも私とほぼ同じような状況だろう。

このように、四人全員共通に通じる言葉はない、というそれぞれの「言語事情」を前提に、ではどうやって連句を巻いていくか。実際に即して説明するのが早道だろう。形式は十二調を採用。他の座は半歌仙だが、国際連句の座は同じ時間で実質三倍の句数を作らねばならないので短い形式になった。日本での興行なので、季の扱いや去嫌などは日本の式目をそのまま適用する。

プレ大会当日、大津のホテルの展望レストランで連衆が会合し、琵琶湖を眺めつつ朝食をとった。その時ラファエルさんが詠んだ句が発句になる。

rising sun

two red-tailed hawks

Over Lake Biwa

Rafael

英語俳句の標準形と同じく、連句の長句も三行分かつ書きが標準形として定着している。日本語の五七五定型に盛り込めると感覚的に同程度の内容量で一句を構成し、音節数にはこだわらない。この句の場合は一行目の末尾に内容上の「切れ」がある。短句は二行分かつ書きにする。短句の句頭を長句より下げて表記する点は日本語の連句と同じだ。ラファエルさんの英語の句は、蕉肝さんが治定後ただちに日本語にする。日本語化については時に私も口を出させていただく。発句の日本語版は、

鷹二つ舞いて琵琶湖の朝日かな ラファエル

となった。季語は三冬の「鷹」。すぐに鄭さんが中国語にする。何語から何語へ移すにあたって、作者と翻訳者、それにその他の連衆も口をはさみつつ、作句意図など確認しながら、わいわいがやがやと進行する。一般に連句の座というのはおしゃべりの密度が濃いものだが、国際連句もそれと同様、あるいはそれ以上だ。全員共通に通じる言葉がないことも障害にならず、一座一体でがやがや巻き上げたという印象が残る。発句の中国語版はこうだ。

琵琶湖上映朝陽

双鷹在飛翔

Rafael

中国語では長句は五字十五字の十字、短句は七字による句を標準とする。この発句は七字十五字の構成で「字余り」だ。この場合はこれで英語版の内容とほぼ逐語的に対応しているが、一般的に漢字十字による長句は、日本語の五七五や英語の三行よりも

盛り込まれる内容がやや多いように感じられた。

もつとも中国語連句の標準形式はまだ模索中とのことだし、国際連句では各国語のバージョンが、それぞれに詩歌としての完成度を追究しなければならぬ。そのうちのどれか一つが「定本」で、他はその「翻訳」というわけではない。句が「意味」として互いに逐語的に正確に対応することより、それだけの句がその言葉による詩歌として、また付合いとして、きちんと成立することを優先する。原案にない要素を多少補っても五字十五字の形にしたほうが中国語の詩句として成り立ちやすいのであれば、それはそれでいいのではないかと思う。

続いて蕉肝さんが亭主役として脇を付ける。発句を受けて、「枯野」「霜」でこれも冬。

枯野へつづく霜の足跡

蕉肝

蕉肝さんは日本語で作句した後、すぐにそれを英語に置き換えるが、日本語で作句する段階ですでに英語も並行して構想しているようにも見える。それを英語を母語とするラファエルさんに示し、何かアドバイスがあつて多少手を入れたりもする。そのやりとりと並行して、鄭さんも中国語版の句を考える。英語版と中国語版はこうなる。

footprints on the frost

leading to the withered field

Shokan

霜上足痕浅 枯野漸遠去

蕉肝

短句なので、中国語版は本来なら七字が標準だが、これも字余りで十字。

第三は鄭さんが中国語十字で作り、ここまで二句と同様に日本語版、英語版が作られる。それぞれ、

落紅拾一葉 共与夢秋光

民欽

秋景を夢にもがなの紅葉にて

民欽

keeping one red leaf

to see this scene

again in my dream

Minqin

中国語の「秋光」は「秋の光」ではなく「秋の光景」の意味だということが、口頭で私達に伝えられる。英語版は中国語版の「一枚拾う」という要素に応じているが、日本語版はそこは表現せず読者にゆだねている。一方英語版には「秋」の字がない。

この句の季は「紅葉」で秋。冬には「冬紅葉」の季語もあるので、冬の前句に「紅葉」を付けても不自然ではないことを利用しての「季移り」だ。ここから三句秋を続け、その最後を月にしようという構想。十二調に定座はないが、五句目は歌仙など一般的な形式でちょうど月の定座にあたる位置だ。次の四句目は私が日本語の句を付ける。

出湯の宿の夜長楽しむ

了齋

at the hot springs inn

enjoying a long night

Ryosai

温泉長夜舒心泡

了齋

軽く詠むのが四句目の心得、こんどは中国語も短句定型の七字だ。これで一巡。この後も同様にして、二飛び四飛びの付け順で進む。

以下、十二調「鷹二つ」の詳細は、本号と前後して刊行予定というプレ大会の作品集を参照されたい。各句ごとに見れば各国語版の間には当然微妙な「ずれ」があるが、にもかかわらず一巻全体としては、各国語版がそれぞれ連句作品として成立している。東明雅先生があらゆる連句の一般条件とされた「付けと転じ」もきちんと成立している。そのことを読み取っていただけのではないかと思う。

連句は、句と句の間に隙間があることによって成り立っている。前句と隙間を空けて次句を付けることで、前句の可能性も自句の可能性も、特定の枠に閉じ込めることなく引き出すことができるし、付句作者だけでなく、読者も「読み」によって創造的にそこにかかわることができる。文芸的なものにかぎらず、「すべてのコミュニケーションの本質は創造的な誤解の積み重ね」だというのが筆者の従来からの持論だが、それを共同文芸として意図的に実践して行くのが連句だ。言い換えればコミュニケーションの本質に近いところをそのまま文芸形式にしたものが連歌、連句だということになる。

句と句の間にそういう「隙間」「遊び」を作ることをもともと前提としているからこそ、三カ国語同時進行の連句などということが、各国語の表現の微妙な「ずれ」などものともせず十分に成り立つ。国際連句初体験で、連句という文芸形式の強さと大きさを改めて実感することができた。

貴重な体験の機会を与えていただいた蕉肝さん、ラファエルさん、民欽さんに深く感謝したい。そしてぜひ、またのご一座の機会をいただければと思う。

A C C連句入門教室のこと 坂本孝子

昭和五十六年四月、朝日カルチャーセンター（A C C）連句実作入門講座開設に当たり、講師の東明雅先生のお言葉の中に「芭蕉以来の伝統を受けつぎ残すだけでなく、芭蕉の芸境を現代の中に活かした作品をめざし、（中略）連句の基礎である懐紙式（連句の構成）・式目（連句の法則）・付け方・転じ方（ともに連句進行の原理）などについては、テキストによって平易に解説して、連句を理論的に把握していただくとともに、それと並行して、クラスの中に「座」をつくり、皆で歌仙興行の体験を出来るだけ多く重ね、それによって、連句をつくる楽しみとコツとを会得していただくつもりである」と示されています。

以来三十年、講師は故秋元正江、故式田和子、原田千町、佛淵健悟の各氏と受け継がれ、現在は市野沢弘子、坂本孝子の二人が担当しておりますが、明雅先生のお考えは、今も変わりなく引き継がれています。

毎月第二・第四土曜日 十時〜十二時
前半三十分は連句の理論 担当 市野沢弘子
連句の構成、式目、付けと転じ、七名八体、蕉風についてなど。

後半九十分は連句の実作 担当 坂本孝子
現在は一年を通して歌仙に挑戦中。毎回二句ずつ進行。即吟の付け句を板書し、前句との付け味・付け心、打越との転じ、一卷の流れ等について、一句の鑑賞や障りの発見、意見の交換などをする。治定されるのは毎回一句ですが、板書されるのは平均二十五句くらい。
現在の受講生は十数人で、いささか風通しの



よい教室ですが、それがかえって、一人で複数の投句が出来ると、質問や連衆の意見発表、他人の視点、美意識や価値観に触れることで、連句の上達に繋がっているのではないかと思っています。また、座としての雰囲気や味わうのにもよいのではないのでしょうか。

時折、国民文化祭や、各地の連句大会に参加しているいろいろな連衆や捌き手に接する機会に恵まれますが、連句の骨法がしっかりしている席に当たった時は、優れた作品が生まれる予感に包まれるものです。

A C C連句教室では三年間研鑽を積まれた方に、蕉風伝承者としての「伝道之書」が授与され、捌き手としての養成を目指しています。
次に示すのは平成二十二年度A C C連句入門教室で、進行中の作品（未完）です。

歌仙『風抱く』 衆議判

糸柳ふんはりと風抱くかな
地下鉄出ればうらかな街
行く春の開幕ベルを待ちかねて
売り子の包む雀弁当
月を背に空魚籠さげて帰る人
穀倉地帯穂波たわわに
片付けて障子閉てれば囲炉裏欲し
縄れた仲を如何に解くか
降りやまぬ雨も愉しきふたり傘
海岸沿ひの江ノ電の旅
ボール蹴り少年と犬戯れて
大き活字の躍る号外
夕映えの残る高層夏の月
税の議論に呷る焼酎
数学は苦手だったと会計士
母校創立百年となる
花吹雪会釈を交す知らぬどち
山間を行くお遍路の列
ナオ
朝食は目刺も並ぶバイキング
BGMはバインスタイン
傍受せし外国情報駆けめぐり
意味が違ふぞ漢字変換
鷹匠と鷹の呼吸はひとと合ひ
浮気するなら死んでやる冬
あの頃は君の嫉妬も可愛くて

明子
照子
朋子
倫子
曜子
有子
富子
健
重子
久子
健
章子
敦子
有
朋
照
倫
朋
富
曜
明
章
敦
有

神楽坂には細き道あり
よれよれの金剛経の落し物
戦跡の月照らす生涯
青空に胸までつかり林檎挽ぐ

新酒や古酒もあるワインバー

健 重 有 久 敦

平成二十二年十一月二十七日現在

朝日カルチャーセンター（ACC）連句入門教室
では、只今二〇一一年度四月生を募集中です。

新宿住友ビル七階・申し込みは四階受付

電話 03 3344 1945

この講座は「入門」とある通り、全くの初心の方にも不安なく受講できる、連句への近道です。お知り合いの方などにどうぞお勧め下さい。（編集部）

猫蓑会入会を振り返って

金子泉美

新年を迎え気分が改まると同時に、節目として昨年のごこと振り返る時期でもあります。

平成二十年、麻布十番の笠置連句、萩窪の四宮会に初めて参加してからまる二年、その後ご縁があり猫蓑会に入ってからおよそ一年が経ちました。

私は四年位前から横浜の句会に参加しておりましたが、式目や去嫌など全く白紙の状態から連句を始めました。

以来、四宮、深川、神楽坂の三実作会、藤祭、明雅忌や初懐紙での実作に参加し、先生方、先輩方のご指導のおかげで少しずつ連句の面白さを味わえる

ようになってきたところです。

そこで、恐縮ですが連句を始めてから学んだこと、気付いたこと、考えたことなどを初心者立場から自由に書いてみようと思います。

まず、笠置や四宮会に参加してとても新鮮に感じたのは、酒食茶菓を大いに楽しみつつ進行する連座のスタイルでした。特にお昼からゆつくりと過ごす四宮会では、青山のお弁当に日本酒、豆源のお菓子、夕方の軽食など盛り沢山。おもてなし美人の式田恭子さん達が楽しい雰囲気を作ってくださりとても居心地よく、皆さんよいアイデアが湧いてきます。最初なかなか一巻の展開について行けず出句に非常に苦しみましたが、少しずつ慣れて行きました。普段作る俳句と作風の違う句ができたところにも、座の力を感じます。

次に、発句が一巻の中でいかに重要な位置を占めているか、ということを学びました。発句には格調の高さが求められ、興行当日の季節感や会場周辺の環境、座の雰囲気などを反映させた完成度の高い作品であることが望ましく、一巻全体に影響を及ぼすような力が必要です。

神楽坂会、深川会では連衆全員が毎月発句を提出し、互選によって最も納得できる作品が選ばれます。これも表現に苦心し、とても緊張する瞬間ですが、貴重な機会だと思います。

よい連句には花、月など自然の美、日常生活の描写、時事風刺、恋などの要素が所定の位置にバランスよく配置されています。特に、発句で四季折々の自然美を陳腐にならぬよう描くことは最も難しく感じます。猫蓑会の先輩方は、古典の美意識を現代の風景描写にうまく活かされているなど感じました。

次に、お捌き様の個性、連衆の個性の多様性の妙について考えさせられました。今まで参加した座で

は、永島靖子先生、坂本孝子先生、土屋美郎先生、中林あや先生、上月淳子先生、原田千町先生、鈴木了齋さん、式田恭子さん……たくさんの方がお捌き役を務められました。私が言葉足らずな付けを提出すると、それをサツと添削してくださったり、没になった短冊の中からリサイクルしてくださったり、緻密な解説をいただいたり。いつも勉強になります。また、お捌き様の個性が一巻の魅力を醸し出すことにも気付きました。

連衆の方々とは毎回新しい出会いがあり、さまざまな個性との化学反応が楽しいです。絶妙な付け味が生まれて座が盛り上がった時には、何ともいえない達成感があります。

それでは僭越ですが、以下に今まで特に印象に残っている付けを挙げたいと思います。

平穏な村に奇病が潜みをり

健

婆が黙つて漬ける辣蕪らつきょう

泉美

（二十一年九月 歌仙「待つひとの」）

宮家の写真いまセピア色

豊美

海亀に乗つて魔王に会ひにゆく

泉美

（二十一年二月 歌仙「紐結ぶ」）

揚雲雀降りる軌跡のまつすぐに

了齋

無口な軍師忽然と去る

泉美

（二十二年一月 源心「本音かな」）

初心者ながら、連句は捌き役と連衆の知識、経験個性が複雑にかけ合わされた一枚の大きなタペストリーなのだ実感しております。皆様との出会い、虚実皮膜の世界との出会いをこれからも楽しんで行きたいと思っております。

● 第百十五回猫養会例会が開催されました

十月二十日(水曜日)午前十一時より、江東区芭蕉記念館にて、第百十五回猫養会例会(俳諧芭蕉忌正式俳諧・明雅忌連句興行)が開催されました。俳諧芭蕉忌正式俳諧興行に引き続き、十卓に分れて、東明雅先生発句による脇起二十韻の実作会が行われ、午後五時閉会しました。当日の作品は今号の二ページから五ページにかけて掲載しています。

● 今後の予定

・平成二十三年初懐紙(歌仙興行)
一月十六日(日)十二時～十七時(受付十二時より)
於 ホテルフロラシオン青山

・平成二十三年藤祭(正式俳諧興行・二十韻興行)
四月二十五日頃
於 亀戸天神社

● 猫養基金にご協力ありがとうございます。

・橘 文子様 平成二十二年十月 一万円
・山寺たつみ様 平成二十二年十月 五千元
・匿名 平成二十二年十一月 二万円
基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店
猫養基金 普通預金 3376045

● 新会員

・加藤 K様 茨城県つくば市在住



● 今後の例会実作会での作品形式

平成二十三年からの猫養会例会での実作会作品形式は、左記の通りに変更になります。

・初懐紙 (一月) 歌仙
・藤祭 (四月) 二十韻
・夏の例会 (七月) 歌仙
・明雅忌 (十月) 源心

● 猫養作品集第二十一号作品募集

十一月二十四日開催の理事会で、猫養作品集の作品募集新要綱が左記のように決まりました。

◎ 従来と異なる点

・あらかじめ出品料を申し受けます。出品料には作品集一冊分の代金・送料を含みます。出品した方には作品集発行時に各一冊ずつ送付します。
・全作品に、三百字以内の留書を添えます。
・出品していないが作品集の購入を希望する方、また出品者で二冊以上を希望する方については、購入申込み、支払いの方法を後日お知らせします。
・発行時期を七月(予定)とします。

◎ 募集要項

・出品料二千元を、会員宛『猫養通信』の今号に同封の振替用紙を使って振込み、その受領書を作品左上隅に貼付またはホチキス止めて下さい。
・必ず、三百字以内の留書を(別途原稿用紙またはワープロにて)同封して下さい。
・締切 平成二十三年二月二八日。
・応募用紙 B4判指定原稿用紙(会員宛『猫養通信』の今号に同封して送付)またはワープロ(B4サイズでプリントアウト)による原稿。

・形式自由 一人一卷(歌仙までの長さ)。

・平成二十一年十二月以降の猫養会員働き作品。

・作品の書式は作品集二十号を参照し、同様にしてください。最初に捌きと一連の作者名をフルネームで書いてください。自他場 季、句番号などは記入しないでください。

・新かな、旧かなの別を明記してください。

・応募に際しては、『猫養通信』第七十三号、また猫養会ホームページ内「連句の規則」等に掲載の「猫養会式目」を参照の上、あらかじめ十分な校合をされるようお願いいたします。

・宛先 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

電話・FAX 03-3309-0953

● 訂正

・前号(第八十一号) P15下段
第十一行 権藤↓権頭 第十二行 浅香↓浅賀
同 P16上段
第二十五行 裾の袂↓紹の袂

季刊 『猫養通信』第八十二号

平成二十三年一月十五日発行

猫養会刊

発行人 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

編集人 鈴木了斎

印刷所 印刷クリエイト株式会社